

新学年の私の組の計画と抱負



力いっぱい育てる

永山 暁美

昨年来、幼稚園教育について社会の関心が大いに高まりつつあり、喜ばしいことであると同時に、私共も、再びふりかえって、歩んで来た道に誤りは無かったかと、任務の重大さに、鞭打たれる思いがいたします。今年度も、万全の努力をすると共に「幼稚園教育要領改訂」の示されるところもよく汲み取って、正しく、たくましく日本の子どもを、力いっぱい育ててゆきたいと思えます。

今年度を迎えるに当たって、特に、この点をと、心組んでいること

を、私の幼稚園の経験の中からまとめてみました

先ず第一に、留意しなければならないことは、多人数の幼稚園であるということ、多人数なればこそ、層、一人ひとりの幼児に、よく行きわたる保育を、先生も、父兄も力を合わせて、築いてゆかなければならないということ、私たちは、自分の責任に、最善を尽すことは勿論、その他のあらゆる機会に、各自の心と手を、惜しまずに幼児たちにそそいでいくつもりです。幼児たちにとって、どの先生、どのお友だちにでも、自由に話しかけられ、依頼できるような雰囲気の中で、個性を失わずに、楽しい団体生活を経験する幼稚園でありたいと思えます

次に、園児たちの安全という問題が、切実に考えられます。七、八年前には、麦畑を通して、二十分も歩いて通ったり、電車を二つも三つも乗り替えて一人で通う園児らを、注意をしながらも、ほめ

＜新学年の私の組の計画と抱負＞

て励ましたことや、駅まで十五分の道を、並んで毎日歩かせたことなど、現在ではどうている、考えられない昔話になってしまいました。幼稚園の玄関、またはスクールバスの停留所で、必ず父兄の手に渡すまでは、心をゆるめることができないような交通難、社会不安の時代です。家へ帰ってから後も、幼児自身が、自ら注意し、身を守るように、折にふれて話し合いを度重ねていこうと思つています。幼稚園で、縄の電車ごっこで遊んだり、交通規則を約束したりした経験を生かして、道路は右側の端を歩く、信号を守って横断歩道を渡る、ふざけたり、あわてたり、急いだりしないで注意して歩くことなど、幼児自身が理解し、実行するように指導していこうと思つています。

健康であるということ、これは、幼児たちの幸福の象徴とも言えるでしょう。元気が、体に満ち溢れて、絶えず活動し、求めている姿を見ると、何よりも大切なのは、健康な身体を作ることだと痛感いたします。幼稚園生活は、入園したばかりの幼児にとっては、しばらくの間負担でもありませんが、規律のある生活になって、運動量も増し、食事も進むようになり、よい生活習慣が身につくようになれば、将来の健康生活の基礎を作ることができます。幼稚園時代に、屋内に入ったら、手を洗いうがいをすること、お手洗の後は、よく手を洗って、ハンカチで拭くことの二つだけは徹底させなければ

ばならないと思つています。

近頃、欠席の多い幼児に、小児喘息という病名をたびたび、耳にするようになりました。大体、腺病質の傾向のある幼児に多く、家庭でも大事をとっている場合が多いように思われます。担任をしている女児の中に、小児喘息の為、四才児の前半の三分の二は欠席で、続くかどうか心配されたので、冬に入って、十時頃に登園するという方法で、かえって出席がよく、無事にこの冬を切り抜けてこられました。今年度は、年長組なので、人並の健康に近づけようと、医師や父兄と対策を相談しているところです。

私たちは、幼児たちに、意欲のある生活経験を豊富に持たせたいと、日夜、努力をし、環境を整え、必要な助力をしたと思つています。遊びの中でも、仕事を通してでも、何事かに熱中し、工夫をこらして発展させようとする態度を、幼稚園生活の中で、できるだけ養っていきたいと思つています。こういう面で、個人の力に応じた誘導保育によって、仕事に対する意欲を伸ばし、完成の喜びを味わうということは大切なことだと思つています。近年、級によっては、女児が活発で、意欲的で、男児をリードしている場合もあるようです。幼児たちの創造力、積極性が、大いに発揮できる場を、これからも研究していきたいと思つています。

今年の秋には、オリンピック東京大会が開催され、幼児教育においても、諸外国のそれと、比べられる機会もあることと思います。社会的な幼児の躰という面では、残念ながら、未だ及ばないところがあるのではないだろうか。

幼稚園においては対人関係、対社会関係など、できる限り社会性を養うように努力し、他人に迷惑をかけないように、公共の場所を汚したり、損ったりしないようにという躰に力を入れておりますが、日本の社会全体に浸み込んだ社会的躰は、完全とは言えません。善意の社会、礼儀のある社会を作っていくかなければならない幼児の躰を、私たちは、もっと研究し繰り返し努力していかなければならないと思います。それには、父兄の理解・努力が、大きな力を持っているので幼稚園と家庭が一体となって、是非、実現させたいと思います。

(洗足学園幼稚園)

幼児の姿から見通して

関 治 子

新学年を迎える時、二つの立場がある。

第一は、新入園児を迎える時で、私たち教師は、気分も新たに、期待と責任を存分に感じることである。新入園児を迎える準備を進めていく間に、個々の幼児の姿を感じ、教師としての精神的な準備体制をつくり始めていく。

第二は、ひきつづき継続して保育する場合の新学年を迎える時である。これは、新たな気分というよりは、過ぎた年の教師個人としての反省、そのクラスとしての特徴というか独自の傾向をよく捉えてみる、ということが先ず頭に浮かんでくる。

第一の場合を考えると、新入園児を迎える心構えとして述べていくと、本題からそれてしまうことになろうが、個々の家庭生活の経験だけをもつ幼児が、はじめて幼稚園という集団社会の生活を経験する時に、その第一歩が、よりあやまりのないものであるように願うところが大きい。あやまりのないという意味は勿論、消極的な気持のあらわれではない。身体的にも心理的にも如何に幼児にとって望ましい経験を体験していかせるかということである。

それを、具体的に考えると「一年間に、このクラスでは、何と何の活動を経験させる」という形で、冒頭に教育内容の計画を綿密に立てることは、無理が生ずるのではないかと私には考えられる。では、どのように実際にやってみたかという点、幼稚園として教育方